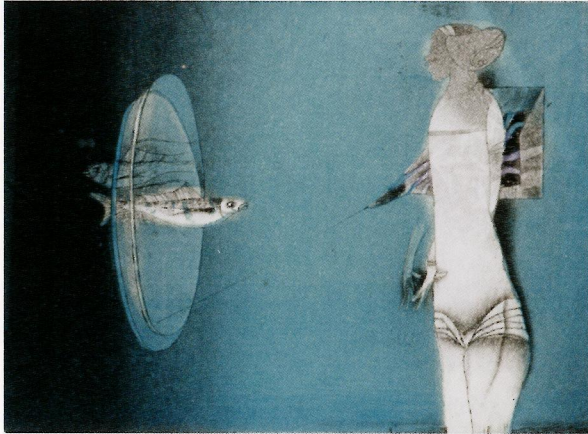


# 游美

Yub i  
No. 71



「夜の動静」詩画集『幻花』より

1983年/エッチング・アクアチント  
13.2×17.6cm/個人蔵



「(無題)」

1993年/水彩、ペン  
33.0×40.5cm/個人蔵

堀井英男は、高校時代までを出身地である茨城県潮来市で過ごしました。潮来は水郷の町として有名で、水辺の美しさと情緒に満ちた風景は、堀井の幻想的・抒情的作風を育む土壌になったとも考えられます。

堀井は文学とくに詩を好み、生涯に4冊の詩画集を手がけました。黒田三郎や田中清光といった現代詩人と共同制作した作品や、高見順の末期の詩集にオマージュを捧げた『死の淵より』(1978年)などがあります。

詩画集も含め現代の人間像を禁欲的に描き出した銅版画と、晩年の開放感に満ちた水彩画とは、対比的でありながら、さりとした質感や色彩感覚、作品に溢れる詩情などに、堀井の意識の根底にあったであろう水の記憶が感じられます。  
(学芸員 永松左知)

## 水から生まれる絵 — 堀井英男の版画と水彩 —

2012年11月3日[土・祝]～2013年1月20日[日]  
茨城県近代美術館

### Contents

- 1 水から生まれる絵  
—堀井英男の版画と水彩—
- 2 館長寄稿(2) 水を感じて
- 3 所蔵作品紹介
- 4・5 特集/父 一色五郎を語る
- 6 探訪/大坪由明先生を訪ねて
- 7 企画展紹介
- 8 企画展紹介  
心に残る私の一点  
あとがき

# 游美

Yub i  
No. 72



アンドリュー・ワイエス (1917-2009) は、自分がよく見知っているもの、自分自身と心の奥深くでつながっていると感じられるものしか描けないと考え、自分が長年住んでいる土地の風景や、身近な友人たちのみを主題として描き続けたアメリカの画家です。静寂感ただよう作風は、アメリカ国内外の多くの人に親しまれています。今回の展覧会では、ワイエスが、隣人であるオルソン姉弟—クリスティーナとアルヴァローと彼らの家オルソン・ハウスを30年間にわたって描いた「オルソン・ハウス・シリーズ」の水彩と素描約80点をご紹介します。

本展覧会は、東日本大震災で被災した茨城県に対し、朝霞市の丸沼芸術の森、株式会社丸沼倉庫より、復興支援のあたたかいお申し出をいただき開催されることになったものです。また、同時開催として、丸沼芸術の森のアトリエで活動をしている作家13名の作品を展示し、若い作家を支援する活動を行っている丸沼芸術の森の活動も、あわせてご紹介いたします。(首席学芸員 平野扶佐子)

## 「霧の中のオルソンの家」

アンドリュー・ワイエス  
1967年/水彩、紙  
55.6×76.4cm  
丸沼芸術の森蔵  
©Andrew Wyeth

## Contents

- 1 朝霞市 丸沼芸術の森所蔵  
アンドリュー・ワイエス水彩・素描展  
同時開催—丸沼芸術の森  
アトリエの作家たち
- 2 2012年私が選んだ展覧会 BEST5
- 3 美に遊ぶ
- 4 探訪/鳥山 豊先生を訪ねて
- 5 美術鑑賞旅行
- 6 所蔵作品から
- 7 企画展紹介
- 8 日本画講座  
あとがき

朝霞市 丸沼芸術の森 所蔵

## アンドリュー・ワイエス 水彩・素描展

同時開催—丸沼芸術の森 アトリエの作家たち

2013年3月27日[水]～5月19日[日]

茨城県近代美術館



幼少期から虫好きだった熊田千佳慕(1911-2009)は、1981年と83年に『ファーブル昆虫記の虫たち』の絵本原画で二度にわたりボローニャ国際絵本原画展に入選した画家です。

千佳慕は、子どもたちにはうそやごまかしのないものを見せたいと、観察にも制作にも時間をかけ、虫の毛のフワフワした触感までも再現するほどの細密さで虫の生態を描き、擬人化された虫が登場する物語でも、より自然に近い姿で表現しました。

本展では代表作である『ファーブル昆虫記の虫たち』を含む約200点の原画を展示し、身の回りの自然を愛し、描き続けた千佳慕の世界をご紹介します。(主任学芸員 今瀬佐和)

## 「ふん玉どろぼうとの争い」 『ファーブル昆虫記の虫たち』より

1978-88年/水彩・ケント紙/26.3×42.5cm  
©Kumada Chikabo

### Contents

- 1 日本のプチファーブル  
熊田千佳慕展
- 2 新副館長のご挨拶  
企画展紹介
- 3 企画展紹介
- 4 所蔵作品から
- 5 探訪/濱 惠泉先生を訪ねて
- 6 美術鑑賞旅行
- 7 美に遊ぶ
- 8 心に残る私の一点  
友の会からのお知らせ  
あとがき

## 日本のプチファーブル 熊田千佳慕展

2013年7月13日[土]～9月16日[月・祝]  
茨城県近代美術館



岡倉天心にちなんだ本展覧会は二部に分けて構成し、第一部では天心の指導のもと北茨城の五浦で研鑽を積んだ横山大観、下村観山、菱田春草、木村武山の作品を、そして第二部では、天心の没後100年を経た現代の作家による作品を紹介します。既に日本美術史のうえでは巨匠に数えられる第一部の画家たちですが、天心のもとで新しい日本美術の創出を目指した当時は、まだ30～40代の気鋭の若手たちでした。本展覧会の第二部でも、これからの可能性を十分に秘めた世代の作家を中心に採り上げたいと考えました。第一部の作品が当時は新しい試みとして多くの批判にも晒されていた事を念頭に、100年前に「新派」と呼ばれたそれらの作品と、現在の作品とを見比べてみてください。（主任学芸員 井野功一）

## 菱田春草「落葉」

明治42年(1909)／紙本彩色・六曲一双屏風  
各154×354.3cm／福井県立美術館蔵

### Contents

- 1 岡倉天心没後100年記念展  
天心の思い描いたもの
- 2 寄稿
- 3 所蔵作品から
- 4 企画展紹介  
美に遊ぶ
- 5 探訪／北沢 計先生を訪ねて
- 6.7 美術鑑賞旅行
- 8 ギャラリートーク  
友の会からのお知らせ  
あとがき

## 岡倉天心没後100年記念展 天心の思い描いたもの

2014年2月15日[土]～3月21日[金・祝]  
茨城県近代美術館

# 游美

Yubi  
No. 75



当館のコレクションより近代フランス絵画やフランスと関わりをもつ作品を選び、フランスの香りただよふ作品を一堂に展示します。モネやルノワールといった印象派の作品をはじめ、19世紀風刺画の巨匠ドーミエの版画など当館所蔵のフランス近代絵画をまとめてご紹介すると同時に、特に茨城の作家に注目し、彼らがフランス美術に向けた憧れの気持ちをそれぞれの作品から感じながら、茨城における“フランス最良”の表れ方をご覧ください。

また、戦前のパリ画壇の寵児となった藤田嗣治や、20代で渡仏し生涯フランスの版画家として生きた長谷川潔、潮来出身で半世紀にわたってフランスの風景を描き続けた村山密など戦後のフランスで活躍した画家たちの作品もあわせてご覧ください。

(主任学芸員 澤渡麻里)

## オーギュスト・ルノワール 「マドモワゼル・フランソワ」

1917年/油彩・麻布・額装  
52×42cm/茨城県近代美術館蔵

### Contents

- 1 フランス万華鏡
- 2 寄稿
- 3 心に残る私の一点
- 4 探訪/土手武彦先生  
土手千鶴子先生を訪ねて
- 5 美に遊ぶ
- 6 企画展紹介
- 7 美術鑑賞旅行
- 8 ギャラリートーク  
あとがき

## フランス万華鏡

2014年3月28日[金]～5月11日[日]  
茨城県近代美術館



本展では、大阪にある国立国際美術館の所蔵作品の中から、セザンヌ、カンディンスキー、ピカソらの作品を導入として、戦後

から現代までの83作品を「美術の冒険」と題して辿ります。第1章「現代アートの起源と『モダニズム』」では、19世紀末のセザンヌ以降の近代美術の歩み、そして大戦後の世界美術の動向を、第2章「美術のフレームを超えて」では、80年代以降、現代美術の表現がいかに多様になったかをご紹介します。

欧米と日本、アジアにおける美術の新たな動向を含んだ、この100年余りの美術は、斬新で個性的な表現にあふれています。常識にとらわれず、未知の芸術世界を模索し続けてきた芸術家たちの活動は、果敢な冒険の連続であったといえるでしょう。

現代美術の様々な表現に親しんでいただける機会として、多くの方にご覧いただければ幸いです。

(主任学芸員 井野功一)

## 美術の冒険 国立国際美術館コレクション展 セザンヌ、ピカソから草間彌生、奈良美智まで

2014年8月9日[土]～9月28日[日]  
茨城県近代美術館

### ヴァシリー・ カンディンスキー 「絵の中の絵」

1929年/油彩・厚紙/69.8×48.7cm  
国立国際美術館蔵

#### Contents

- 1 美術の冒険  
国立国際美術館コレクション展
- 2 新館長/新副館長のご挨拶
- 3 新企画・学芸員に聞く
- 4 探訪/清水 優先生を訪ねて
- 5 美術鑑賞旅行
- 6・7 ギャラリートーク/絵画講習会
- 8 企画展紹介  
友の会からのお知らせ  
あとがき



## 野沢二郎「水面／薄明」

2011年／油彩・キャンバス  
291.0×218.0cm  
茨城県近代美術館蔵



野沢二郎氏アトリエ

本展は、美術作品が生まれるアトリエと、作品を生み出す作家に注目する展覧会です。普段美術館などで展示されている作品を目にしたとき、それがどこでどのように作られたのか、どんな人のどんな発想から生まれたのか、想像してみることはないでしょうか。作品が生まれる場と、そこで制作する人の感性や身体感覚との関係は、作品を見ているだけでは想像しにくいものですが、作品のアイデアと具体的な形を生んだ作家と空間を知ることで、わたしたちは見慣れた作品にも、また初めて触れる作品にも、すこし近づくことが出来るかも知れません。本展では、明治から現代までの20人の作家をとりあげ、彼らによる作品生成の場を作品とともに見ていきます。

(学芸員 永松左知)

## 作家とアトリエ展

作品を生み出す身体、創造の場

2014年12月20日[土]～2015年2月15日[日]

茨城県近代美術館

### Contents

- 1 作家とアトリエ展
- 2 学芸員に聞く
- 3 企画展紹介
- 4 探訪／藤島 大千先生を訪ねて
- 5 美に遊ぶ
- 6 美術鑑賞旅行
- 7 ギャラリートーク
- 8 心に残る私の一点  
友の会からのお知らせ  
あとがき



喜多川歌麿「両国橋 船あそびの女たち」

寛政7-8(1795-1796)年/錦絵大判三枚続/36.5×76.0cm/中右コレクション

江戸時代。花魁や茶屋娘を描いた美人画や、人気役者を描いた役者絵などの浮世絵は、そこに描かれた衣装や装飾品、髪形が流行の最先端としてもはやされ、現代の雑誌やブロマイドのような感覚で庶民たちに親しまれました。美人画では、八頭身美人を描いた鳥居清長、上半身をクローズアップして描く「大首絵」を確立した喜多川歌麿らが活躍し、役者絵では、写実的な似顔絵の勝川春章や、役者の一瞬の表情を大胆に表現した東洲斎写楽、役者の華やかな姿を描いた歌川豊国らが人気を博しました。本展では、寛政期から文政期を中心に、肉筆画を含む135点の美人画と役者絵を展示し、江戸町人文化の賑わいとともに花開いた黄金期の浮世絵の魅力を紹介します。(主任学芸主事 横山智絵)

## Contents

- 1 歌麿とその時代  
——黄金期の浮世絵
- 2 学芸員に聞く
- 3 企画展紹介
- 4 探訪/新山 礼子先生を訪ねて
- 5 美に遊ぶ
- 6 美術鑑賞旅行
- 7 ギャラリートーク/  
印象に残る美術館
- 8 心に残る私の一点  
友の会からのお知らせ  
あとがき

## 歌麿とその時代

### ——黄金期の浮世絵

2015年4月8日[水]～5月31日[日]  
茨城県天心記念五浦美術館